

出井雅彦先生のご退職にあたって

長島 雅裕

出井雅彦先生は、1991年に文教大学女子短期大学部に専任講師として着任され、助教授・教授と昇任された後、2005年に教育学部の教授として移って来られました。教育学部では19年間、文教大学ということで考えると33年にわたり本学で教鞭を執られ、2024年3月に定年を迎えられます。

先生は、一貫して珪藻の研究をされてきました。珪藻は大変小さな植物ですので顕微鏡で観察しなければなりません。さらに細かい構造を見たい場合は電子顕微鏡も必要になります。出井先生の研究上の功績の一つとして、珪藻研究にいち早く電子顕微鏡を導入されたことが挙げられますが、時折、精細な顕微鏡写真を、実に嬉しそうに見せていただいたことは忘れられません。また、卒業研究のテーマとして4年生が珪藻を扱うことも多く、卒業研究発表会ではまるで魔法の呪文のような珪藻の学名を淀みなく口にしていた学生たちのことも思い出されます。専門の研究を生きた形で教育に活かすという大学教員のあり方を見事に実践されておりました。日本珪藻学会の会長を務めるなど研究の世界での貢献も高く、長年の珪藻の御研究は、つい最近、『驚異の珪藻世界』という立派な図鑑に結実され、研究成果が広く社会に還元されているということも申し添えておきたいと思います。

先生は、時折、御実家の畑の農作業をされておりました。ご多忙な中、また猛暑の中の作業はさぞかし大変だったろうと思うのですが、言葉の端々に楽しさが滲み出ていました。隣の研究室のよしみで収穫物を分けていただくこともありましたが、品種や特長について楽しそうに説明していただいたことも思い出されます。このようなことも、植物学研究者の礎として活かしているのかもしれない。少なくとも先生の立派な体格を形作る上では重要だったのではないのでしょうか。

先生は学部長・課程長などの要職を長きにわたり務めてこられました。私が本学に着任した翌年から課程長をされましたので、私の知っている出井先生のほとんどは「学部執行部にいる出井先生」、ということになります。特に6年間の学部長時代は、学部の改組を先導され、大変な御苦労があったことと思います。内部からの自発的な改善のための改組ではなく、外部からの要請に基づくものでありましたが、同様のことは全国の大学でも大規模に発生しました。予算も増えず、人も増えるわけでもなく、文部科学省に足枷をはめられ、その中で「前向き」な改革をせねばなりません。「改革疲れ」などと言われるように、全国の多くの教職員が疲弊しました。これが正解、というものが無いにもかかわらず諸事情によりタイムリミットが定められてしまい、構成員皆が納得する余裕もなく進めざるを得ない「改革」は、本当に辛いものです。前任校でそれを経験していた私は、そのため、学部改組が避けられないとわかると随分と重苦しい気分になったものです。しかし、それを先頭に立って進めなければならなかった学部長という立場にあった先生は、想像もつかないほどお辛かったに違いありません。組織の形はともかくにも改められましたが、改革のゴールはまだ先であり、変化する入試や就職環境にどう対応するかで成否が問われます。バトンを受け継ぐ私たちに課せられた課題として、努力していかねばなりません。

改組が一段落したところで、私は学部の入試の責任者を命じられ、様々な機会学部長としての出井先生や課程長の先生方と一緒にいる機会がありました。受験生にとっても改組があれば様々な判断が変わります。志願者数も変われば手続き率も変わります。これまでとは違う状況で入学者を確保するには

それなりの苦勞がありました。出井先生には何かと氣を遣っていただき、こちらの要望も色々と聞いていただき、仕事がしやすいように取り計らっていただきました。この場を借りて、あらためて御礼申し上げます。

出井先生はその屈強な身体でおそらくこれからも積極的に様々な場に出ていかれることと思います。退職はひとつの区切りではありますが、今後の一層のご活躍を祈念いたしております。

(ながしま まさひろ 文教大学教育学部学校教育課程理科専修)